リテラシーの「複数性」の２つの意味合いとは？

――2014年度日本言語政策学会秋季特別研究集会「多言語・多文化社会におけるマルチリテラシーズ教育の重要性」報告――

日本言語政策学会・会員

門倉正美

2014年度に実施された研究集会だが、「マルチリテラシーズMultiliteracies（複数のリテラシー）」という観点は、現在の日本の言語政策を考えるうえにおいて重要と思われるので、概要を報告したい。

本研究集会は、2014年11月３日に京都大学において、２つの日本言語政策学会科研グループ（主催：岡本能里子代表「言語教育へのビューイング教育の導入」課題番号24320097、共催：西山教行代表「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」課題番号23242030）の連携のもとに行われ、約50名が参加した。

当日のプログラムは以下の通りである。

基調講演：Len Unsworth（オーストラリア　カトリック大学）

　演題：Introducing multiliteracies pedagogy in multicultural elementary school

classrooms in Australia: Teaching literacy of English as an additional

language or dialect(EALD)

（オーストラリアの多文化状況の小学校教室にマルチリテラシーズ教育法を導

入する―加算語ないし方言としての英語のリテラシー教育において）

報告者：濱嶋聡（名古屋外国語大学・アボリジニー教育研究）「マイノリティー教育の観

点から：アボリジニへのTwo-Way教育」

　　　　門倉正美（元横浜国立大学・日本語教育研究）「言語教育とメディア・リテラシ

ー、マルチリテラシーズ、ビューイング：ことばとイメージの関連を

どう＜読む＞か？」

　基調講演の趣旨を理解していただくために、まず、「マルチリテラシーズ」という用語の意味を説明しておきたい。マルチリテラシーズとは「リテラシー」の対象を従来のように「言語」つまり「文字と音声」に限定しないで、「意味表現のあり方」全般として「マルチにmultiple（複数的に）」とらえる姿勢を表している。例えば、スマホ画面で表現されているものや、あるいは私たちの日常の会話を見てみれば、そこでは「言語」だけが交わされているわけではなく、画像・映像（表情・服装）などの視覚表現、音楽・音響（声の調子・周囲の雑音）などの音響表現、レイアウト（空間的位置関係）などの空間表現、操作性（身振り）などの身体表現など、さまざまな「意味表現のあり方（modality）」を通して意味がやりとりされているのである。インターネットの発達やスマホの驚異的な浸透による「多種多様な（multi-modalな）表現」の氾濫は、私たち（聴覚健常者）のコミュニケーションの原点とも言うべき口頭会話の表現・理解の「多様性」にあらためて気づかせるとともに、マルチリテラシーズの観点にたった教育の重要性・必要性を喚起している。

英語圏における先駆的な英語教育研究者たちが一堂に集ってマルチリテラシーズ宣言を発したのは1995年（本の刊行は2000年：Cope & Kalantzis(eds.); *Multiliteracies---Literacy Learning and the Design of Social Future*, Routledge）であり、その後、英語圏を中心として世界中の言語教育においてマルチリテラシーズ教育が広まってきている（その最新の報告は、Kumagai et al. (eds.); *Multiliteracies in World Language Education*, Routledge, 2016）。

基調講演者のLen Unsworthは、オーストラリアの、特に初等・中等教育におけるマルチリテラシーズ教育の理論的指導者であり、その著書“*Teaching Multiliteracies Across the Curriculum*, Open University Press, 2001”は、言語教育にとどまらず、理科や社会科など、あらゆる教科でマルチリテラシーズの観点が有効であることを、教科書挿絵の分析などによって解明している。本講演では、オーストラリアのウィリーパーク公立小学校でのマルチリテラシーズ教育実践２例が報告された。２例とも、海洋生物の挿絵とその説明文、および環境問題についての絵本の絵とテキストの関係、つまり視覚表現（枠組frameというレイアウトと色調）と文字テキストとの複合的効果を小学生に分析させたものである。

　マルチリテラシーズ教育の領域の中でも、Unsworthがとりわけ着目しているのは、実践例の報告の中心テーマでもあった視覚表現と文字テキストの複合による意味表現のあり方である。講演でも、冒頭でオーストラリアの言語教育カリキュラムがこの点を強調していることが紹介された。そこでは、「生徒は（各学習領域での）知識がどのように言語と視覚情報の協働によって提供されているかを学ばなければならない」と述べられている。また、講演の最後では、イメージと文章との複合表現の中心的重要性を認めることが英語教育研究者のコンセンサスとなっているとして、この点に関するDresang, Lemke, Kress, Lukeなどの主要な研究者の引用が列挙された。

　門倉の報告では、視覚表現と文字テキストの複合表現の理解・表現のあり方の解明が重要課題というUnsworthの基調講演の趣旨に賛同を示し、マルチリテラシーズ派のそうした課題設定は、英語圏におけるメディア・リテラシー運動を担った英語教師たちの教育研究の蓄積にひとつの基礎を有しているのではないかと述べた。また、メディア・リテラシーにおけるイメージの「文法」解読のプロセスは、英語圏の英語教育における「ビューイングviewing（視覚表現理解）」領域の導入にも成果を残していることが報告された。

　濱嶋は、オーストラリアの先住民であるアボリジニ研究の観点から、アボリジニへのTwo-Way教育について報告した。Two-Way教育では、「元のバイリンガル教育の効果的な要素を組み入れて、英語識字力、基礎計算力、アボリジニ言語・文化学習における高い成果を目的としている」。オーストラリアの北部準州でのTwo-Way教育は、英語のみの授業を実施している学校よりもすぐれた成果をあげているのだが、2008年に当時の北部準州教育相は、突然、段階的バイリンガル教育を廃止して、英語のみの授業にする政策を発表して、教員、研究者から激しい反発を招いて、その政策をとりさげ教育相を辞任した。

　このように政策上での揺り戻しがいろいろな形であるとはいえ、オーストラリアは多文化主義を国是とし、先住民へのTwo-Way教育にも取り組んできている。マルチリテラシーズ教育の理論的土台である“*Multiliteracies”*の共編者であるBill CopeとMary Kalantzisはオーストラリアの移民に対する言語教育を主要なフィールドとしている。その脈絡の中で、マルチリテラシーズの「マルチ（複数性）」のもう一つの意味あいが浮かび上がってくる。それは、「リテラシー」の対象言語を規範的に唯一化しないという点である。英語教育でいえば、イギリスのQueen’s Englishやアメリカ東部のインテリの英語などを規範として特権視することはやめ、各国・地域、あるいは各階層によってさまざまなEnglishがコミュニケーションのツールとなっていることを認める姿勢を意味している。この点は、“*Multiliteracies”*では、Englishesという印象的な用語で表されているが、近年の英語教育では、World Englishesと言われることが多いようだ。

　さて、ひるがえって日本の言語政策との関連で、マルチリテラシーズの問題提起を受け止めた場合、私見では、次のような点が焦点となってくるように思える。まず、Englishesとの対応でJapanesesという観点をとるとすると、「正しい日本語」とか「美しい日本語」という表現に潜在している偏狭に陥りやすいナショナリズム性にたえず注意を払うことである。また、多言語・多文化主義という本研究会の趣旨との関連では、在住外国人の日本語学習権や継承言語学習権の保証をめざすとともに、市民・生活者として必要な情報が「やさしい日本語」で得られる情報環境をつくっていくことも重要である。

　次に、Unsworthの基調講演が重点をおいた、視覚表現、音響表現、空間表現などの多種多様な意味表現の多相的（multi-modal）なあり方の教育という点では、日本においては、まずその土台となるメディア・リテラシー教育の推進が望まれる。日本でも2000年前後に国語教育やマスメディアの中でメディア・リテラシーを促進する機運が見られたが、その後、そうした動きはほとんど停滞しているようにみえる。しかし、スマホやタブレットなどの画面における多相的な表現が、特に若者たちの日常生活に深く浸透していることを思えば、メディア・リテラシーの現代化ともいうべきデジタル・リテラシー教育が必須であることは確かだろう。その点で、日本言語政策学会が、学会設立趣旨に、「狭い意味での言語の問題だけでなく、コミュニケーションとインターアクション一般の問題を考察する必要」があることを謳い、2013年の第15回研究大会から「メディアと言語政策」との関連を議論するべく、３大会続けて、「メディアと言語政策」、「メディア・リテラシーと言語教育政策の課題」、「マルチリテラシーズと言語政策」の分科会を設けて、リテラシーのあり方の現代的変化に対応する言語政策の在り処を探究してきているのは、心強い。益々メディアを通したコミュニケーションの影響力が増す現在社会において、本学会の重要テーマとして継続して議論を深め、政策提言につなげて行きたい。